

岡山学芸館高等学校

グローバル社会に貢献できる リーダー育成のための研究開発

【構想の概要】

岡山学芸館高等学校は建学以来、全校を挙げてボランティアや東南アジアの開発途上国において教育支援を行うなど様々な形で社会貢献に取り組んできた。グローバル・リーダーに求められているのは、新しい価値の創造だけでなく、まずは現状の社会が抱えている課題の是正が必要であると考えます。その課題の一つが、世界に蔓延する貧困や不平等の是正である。具体的には、「世界に貢献する」グローバル・リーダーに必要な資質・能力を「グローバル・マインド・問題解決能力・交渉型コミュニケーション能力・協働力・実践力」の5つに集約し、これらの資質・能力の養成・修得を進めるものである。この5つの資質の修得にあたり、PBL(Project Based Learning)の手法を用いて、実践活動を伴う研究活動を行う。



岡山学芸館高校SGHに関わる教育課程表

教科	科目	履修単位	1年	2年	3年
グローバル スタディーズ	グローバル課題研究Ⅰ	1	1		
	グローバル課題研究Ⅱ	1		1	
	グローバル課題研究Ⅲ	1			1
	総合的な探求の時間	1	1		

科コースの編成とSGH対象		特性	対象生徒数
普通科	清秀高等部	6か年教育専用コース	74名
	医進コース	旧帝大、最難関私大、医学科 ※理系特化型カリキュラム	54名
	スーパーVコース	旧帝大、最難関私大	240名
	特別進学コース	難関大学	415名
	進学コース	文武両道による進学	549名
英語科	2年次に1か年留学	79名	
SGH対象生徒数			862名

教育課程の工夫と教科関連系

岡山学芸館高等学校では、学校設定教科としてグローバルスタディーズ、学校設定科目としてグローバル課題研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを設定し、課題研究の授業を展開している。ここでの学びを教科横断的なものとするため、本校では「教科のSGH化」と銘打ち、英語、国語、社会、情報との連携を密にして、課題研究と教科が有機的に結びつくよう工夫している。特に、英語はコミュニケーション英語の改革により、英語で行うミニ探求をはじめとした取り組みが結果として現れ始めている。卒業時におけるCEFRB1以上取得者がSGH対象クラスのうち39%まで向上した。これはSGH指定以前の11%から飛躍的に増加している。



異なる教科の教員の係わり合いは、SGH指定を契機に大きく変化した。SGH対象科コースに所属する教員のうち65%が課題研究に関わっている。このため、課題研究の進め方等に関して異なる教科の先生方がお互いに意見を交わす機会が増加した。最近では異なるテーマのゼミ間で連携して、様々な視点を生徒が享受できるよう教員が工夫している。

課題研究活動の特徴と生徒の意識

グローバル課題研究Ⅰ（1年生）では、①全ての対象クラスをシャッフルすることで多様性を担保した課題研究用クラスの設定②教員が作成するオリジナル教材の使用（毎年改訂）③アクティブラーニングをベースにした100分授業の展開、という3つの特徴的取り組みを行っている。グローバル課題研究Ⅱ（2年生）ではPBL(Project Based Learning)の手法を用いた、Action Planの作成と実行を基本とした実践活動を伴う研究活動が特徴である。考えたことを実社会で表現することを必須とすることで、社会貢献意識が育めていると自負している。グローバル課題研究Ⅲでは研究の再策定と普及活動を行

っている。このように研究活動の振り返りを重視することで、生徒の自己成長の再認識につながっている。

質問項目	1年生	2年生	3年生
視野が広がった	82%	90%	85%
新たな発見や思考を持つようになった	82%	90%	83%
世界の出来事への興味関心が深まった	75%	81%	79%
社会問題の解決に向けて高校生ができることがある	78%	86%	80%
自分の考えを表現したりディスカッションができるようになった	63%	67%	58%

課題研究の評価

課題研究の成果は以下3点により行っている。①課題研究ルーブリックによる活動の客観的評価②グローバル・リーダーに関するアンケートによる5つの資質能力の間接的評価③自己成長評価ルーブリックによる5つの資質の自己成長評価。このように客観的評価と主観的評価を合わせて評価している。

観点	準備	行動	チェック	明確化
評価レベル	Stage 1	Stage 2	Stage 3	Stage 4
問題意識の設定	興味関心が定まっており、問いに対して研究活動するのイメージできている状態。	先行研究で何をやるのが明確になっている状態。（題名、論文、読めるデータ等が分かっている状態）	先行研究を通して、研究を行う社会的課題が客観的に立証できている状態。「問い」が問いとして成立している状態。	研究テーマおよびサブテーマが決定しており、明確に課題研究の問題意識を他者に説明できる状態。
Action Planの策定	問題意識がある程度明確化されており、その解決にあたりどのような活動が効果的であるか議論できている状態。	問題意識をもある程度明確化されており、自分達で、どこに、何を、どうやって活動するのかが議論できている状態。	問題意識が明確化しており、どこに、何を、どうやって活動するのかが決定している状態。また、効果測定の議論ができている状態。	問題意識が明確化しており、どこに、何を、どうやって活動するのかが、また効果測定の準備が完了している状態。
Action Planの実行	問題意識に対応した行動になっているか確認ができている状態。また、外部連携機縁が決定している状態。	活動の目的、権限が決定しており、行動の準備がすべて整っている状態。	実際に行動を行い、活動成果をアウトプット化できている状態。（活動履歴を残している）	実際に行動し始める準備が整っている状態。（取得したデータの整理ができている状態。）
Actionの効果測定	自分達が実施したデータから、問題意識に対応したデータを抽出できている状態。	抽出したデータの関連性を明らかにし、グラフ等により適切にデータの可視化が行われている状態。	抽出したデータの関連性を明らかにし、問題意識に対応したものであることを論理的に明らかにできている状態。	骨子で、問題意識の策定から行動、効果測定までを整理し直し、論理的な流れが立てられているか確認できている状態。
研究の考察	自分達の先行研究、問題意識、Action、効果測定すべての素材がそろっていることを確認できている状態。	問題意識（リサーチクエスト）の考えとなる結論を、データに基づく事実（根拠）としてまとめられている状態。	得られたデータ（事実）から新たな問いを発生し、次年度に向け引き継ぎ準備がまとめられている状態。	すべての研究活動の準備が完了し、自分達の研究活動のすべてが可視化されている状態。

課題研究の成果と普及活動

目標設定数値に関しては、概ね達成できる状況にある。特に先にも記載した英語力の向上、自主的に留学あるいは海外研修に参加する生徒数が161名から365名への増加など、SGH指定を契機に大きな変化を得た。普及活動に関しては、公式SNSの開設、小中学校と連携した出前授業や中学校の職員研修での講演の実施を通して、外部普及活動への参加生徒数193名（延べ数）の実績など、取り組みを年々増加させている。また、他校との連携したカンボジア合同研修会の開催や地元NPOと連携したワークショップの開催など縦横の新たな関係性が広がっている。



課題研究課題と新たな取り組み

課題意識は、評価において2年生をピークに3年生で数値が下がることである。生徒のより主体的な研究活動を促すことが必要だという認識から、今年のテーマを「教員のファシリテーター化」を合言葉に教員のスキル向上に努めている。